
佐渡 新潟瞬間移動の壁 ~ CONAN IN SADO ISLAND ~

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

佐渡 新潟瞬間移動の壁〜CONAN IN SADO ISLAND〜

【Nコード】

N2156B

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

新潟市内で殺人事件が発生！ しかし容疑者の男はアリバイを主張する。そしてそのアリバイの証人はほかでもないコナンたちだった…。どうやってたら一瞬にして佐渡ヶ島から新潟市へ移動できるのか、その壁にコナンが挑む！

(前編)

「永らくご乗船ありがとうございます。御座いました。間もなく本船は両津港に到着いたします。お降りの際にはお忘れ物のないように、また足元に注意してお降りくださいませ」

新潟港を出発してジェットfoilで1時間ちょっと。目の前に佐渡ヶ島・両津港が見えてきた。

「? : そろそろ着くのか?」

いままで船内で寝ていた毛利小五郎が目を覚まし、隣に座っていた娘の蘭に聞いた。

何せこのジェットfoilに乗るために、夜中に東京を出発し、ここまで一睡もせずレンタルカーで閑越自動車道を北上して新潟までやって来たのだ。乗っている間に睡魔も襲ってくるであろう。実際、小五郎はジェットfoilが新潟港を出発して間もなく高いびきをかいていたのだから。

「 : だそうよ。コナン君も荷物をまとめておいてね
「うん」

それを聞いた江戸川コナンが下船の準備を始める。
周りに座っていた客も下船の準備を始めたようだ。

*

今回コナンたちが佐渡ヶ島を観光することになったのか、それは1ヶ月ほど前のこと、たまたま小五郎たちが「毛利探偵事務所」の上にある自宅でTVを見ていたときだった。

その日放送していたのはよくある紀行番組で、その日の放送では佐渡ヶ島を特集していたのだった。

丁度番組では佐渡ヶ島のある酒蔵で女性タレントが酒作りをしている男性に話を聞いているところだった。

「 : と言うことは、今年は美味しいお酒ができたということですね

「？」

「…なんだって？」

その話を来た小五郎の目の色が変わった。

そして身を乗り出すようにTVをじっと眺める。

「ちよつと、お父さん！」

蘭が言うがその声も耳には入っていないようだ。

小五郎はじっとTVを凝視していた。

「では、一寸失礼して」

そう言つとその女性タレントは猪口に入った日本酒を飲み干した。

「…本当、味がまるやかで美味しいですね」

「ええ、例年に無く今年は美味しいお酒が出来ましたよ。皆さんも佐渡にお越しの際には是非、ウチの日本酒を味わつて欲しいですね」

*

番組が終わつたあと小五郎はTVの前で何やら考え込んでいた。

…と、不意に、

「…行くぞ」

「え？」

「行く、つて何処へ？」

思わず蘭とコナンが聞き返す。

「だから佐渡へ行くんだよ！」

「佐渡？」

「ああ。あんな美味そつな酒、飲まずにいられるか！ 佐渡に行つて美味しい酒、たらふく呑みにいくぞ！」

（…ハハハ、おっちゃんらしいや）

とまあ、少々動機は不純だったわけだが、それからホテルの予約や佐渡でのバス旅行での予約などをいろいろと済ませ、こうしてコナンたちは佐渡ヶ島へと向かっている、と言うわけである。

ちなみに翌日は新潟市内観光の予定を組んでいる。

*

そして両津港を出てすぐそばにある観光バス乗り場にやって来る3人。

「…確かこのへんに受付があつたはずなんだけどなあ…」

そういつと小五郎が辺りを見回す。

「…あ、お父さん、あれじゃない？」

蘭が指差した方向には「佐渡ヶ島観光バス乗車受付」と書かれてある。

「…ちよつと待つてる。手続き済ませてくるから」

そういつと小五郎は受付に向かっていった。

「…結構開けてるんだなあ…」

コナンは周辺を見て呟いた。

新潟からジェットfoilでも1時間以上、カーフェリーだと2時間半もかかる場所だからいろいろと不便な面があるのではないかと考えていたのだが、それはまるで大違い。ちよつと目には新潟市内と大して変わらないくらいである。これならわざわざ新潟市内に行かなくとも大抵のものは島内で揃うのではないだろうか？

コナンはそう思いながらあたりを見回す。…と、

「…ん？」

ある一点でコナンの目が止まった。

そう、ジャケットにサングラス姿の中年の男がコナンの視線の先に立っているのだ。

観光客のようにも思えるがそれにしてはこれといった荷物も持っていない。

(…なんだ、あの男は？)

そのときだった。

「…ほら、切符だ。あのバスに乗れってさ」

そう言うつと小五郎は既に停まっているバスを指差した。

「…コナン君、行くわよ」

「う、うん」

コナンの思考はそこで中断してしまった。

そして三人はバスに乗り込んだ。

そして次々と他の乗客も観光バスに乗り込む。

そして、コナンがさつき見かけたあのジャケットにサングラスの男もバスに乗り込んだ。

「あ…」

「…どうしたの、コナン君？」

「あ、いや、なんでもないよ」

やがてバスは両津港前の乗り場を出発した。

*

「本日は当観光バスをご利用いただきまして誠にありがとうございます御座います。本日皆様のお供をさせていただきます、運転手は北村、バスガイドは私、森本と申します。どうかよろしくお願いいたします」

そう言うつとその森本と名乗ったバスガイドは挨拶をする。

「…早速ではありませんが、本日のバスツアーに参加されているお客様の確認をするために点呼を取らせていただきたいと思いますので、代表者の方は手を挙げてくださいね」

そう言うつとバスガイドは点呼をとり始めた。

「…え、そして毛利様、三名様ですね」

「あ、はい！」

そう言うつと小五郎が慌てて手を挙げる。

「…ありがとうございます」

そして何人かの点呼が終わったあと、

「…えー、桂木様。一名様ですね」

「…あの男じゃねえか…」

コナンは手を上げた男を見て呟いた。

そう、その男こそコナンが両津港で見たあのジャケットとサンダラスの中年男だったのだ。

そしてバスは佐渡ヶ島の名所を回っていった。

尖閣湾に乗った遊覧船で日本海の荒波にもまれ、佐渡金山で金の採掘が盛んだった遙か昔の思いを馳せ、一行は昼食をとるために越の松原へとやってきた。

そこにあるレストハウスで昼食をとったあと、

「コナン君、外に出よう」

「うん」

蘭の誘いでコナンと小五郎は外に出て、浜辺に来ていた。

「晴れてて本当に気持ちがいいわね」

蘭が伸びをしながら言う。

「…本当だな。しかし日本海、つてのは波が荒いなあ…」

小五郎が言う。

「本当ね。これから冬に向かうから、ますます波が荒くなるわね」

蘭が言う。

そんな二人の会話を聞きながらコナンは浜辺を歩いていた。

佐渡ヶ島は意外と気候が温暖で、新潟市と比べると冬も積雪が少ない、と言う話を聞いたことがあるが、それでもやはり一度海が荒れるとなかなか新潟市との連絡も取れなくなるであろう。そうなる、これだけ開けている、と言うのも納得が行く話ではあるが。

そんな事を考えていると、

「…おや？」

不意にコナンの足が止まった。

あの、今回のバス旅行にひとりで参加している桂木と言う男が浜辺に立っていたのだ。

よく見ると右手に携帯電話を持ってなにやら話をしているようだ。

(…何やってんだ？ あの男は)
別に携帯電話をかけるくらいならレストハウスの回りにいくらでもあるだろうに何でわざわざこんなところに来て電話をかけているのだろうか？

そのときだった。

「コナンくん、何やってるのー？」

蘭の声が聞こえた。

「なーに、蘭ねーちゃん？」

「そろそろ人形芝居が始まる、って言うから中に入るわよ！」

そう言えば、ここで昼食をとった後、近くにあるリゾートホテルで人形芝居を見物する事になっていたのでコナンは思い出した。

「う、うん。今行くよ！」

そしてコナンは二人の下に駆け寄っていく。

コナンたちが人形芝居が行なわれる、と言う部屋に入った頃、彼らと一緒にバス旅行をしている観光客達が既に何人か席に座っていた。

コナンたちも空いている席を見つけて座る。

そして程なく、その人形芝居の保存会の会員と名乗る人物の説明が始まったが、あの男は中に入ってこなかった。

そして、人形芝居が始まって間もなくの頃、あの男がそつと小屋の中に入ってきた。

そして空いている席を見つけるとそこに座った。

(…一体何してたんだらう？)

どうもコナンはあの桂木と言う男の行動が気になっていた。

*

そしてバス旅行は午後の観光が始まり、小五郎が今回の佐渡旅行を決定する事となった真野地区へとやってきた。

…はい、皆様。この真野地区は3つの蔵元が集まっているところ

から昭和58年、1983年に三二独立国『アルコール共和国』を宣言し、無料の利き酒体験や酒造見学を初めとしたさまざまなイベントが行なわれている場所でもあります。皆様の中にもね、お酒がお好きと言う方も多いと思いますが、くれぐれも飲み過ぎないようにお気をつけてくださいませ」

バスガイドの声に思わず苦笑する小五郎だった。

そしてその真野地区のある酒造の見学を終わってコナンと蘭がバスに乗り込んだ。土産でも買ったか、蘭は右手に袋をぶら下げている。

「…あれ？ おじさんは？」

「お酒買ってるんじゃないの？」

そんな事を言っていて間もなく、何やらぶつくさ言いながら小五郎がバスに戻ってきた。

「…あれ？ お父さん、お酒買わなかったの？」

蘭が聞く。と、

「あたりめえだ！ あのテレビでやってた酒つてのがなあ、四合（約720ml）しか入ってなくて5000円もするヤツだったんだよ！ そんな高い酒が買えるか！」

それを聞いた蘭が思わずくすくす笑い出してしまう。

（ハハハ、結局佐渡まで来た意味なかったじゃねーか）

コナンもそう思っていた。

「何がおかしいんだ？」

そんな二人を見て小五郎が言う。

「ああ、ゴメンなさい、お父さん。そうだと思ってほら」

と、蘭が袋を見せた。

「…なんだ、そりゃ？」

「日本酒が入っているっていうケーキとチョコを買っておいたわよ。ホテルで食べようね。…あ、コナン君も食べられる、って言ったわよ」

「…なんでえ、ブランデーケーキとウイスキーボンボンの酒が日本酒に変わっただけじゃねーか」

「…ふーん。じゃあいらないわね」

「食うよ！」

バスが発車してからも小五郎は何やらぶつくさ言っていたようだが、妙宣寺 大膳神社と回り、ときの森公園に着いてトキの群れを見た頃には心も癒されたかいつもの小五郎に戻っていた。

そして最後の目的地である芸能とときの里を見た後、バス観光を終えて、両津港に戻った頃には既に日が西に傾こうとしていた。帰りのジェットfoilまで少し時間があつたことから、コナンたちは待合室でジェットfoilの乗船時間が来るのを待っていた。

コナンが何気なく辺りを見回したときだった。

（…あれ？）

そう、その待合室に今朝からずっとコナンたちと共に佐渡ヶ島観光をしていた桂木と言う男も座っていたのだった。

（…あの男も新潟に帰るのか…？）

そんな事を考えているうち、ジェットfoilの乗船が始まり、コナンたちはジェットfoilに乗り込んで新潟へと戻った。

*

新潟港に着いた時にはすっかり日も落ちて辺りは暗くなっていた。とりあえず食事にしよう、と言うことになり、施設の中にある食堂に入り、注文を通した。

（…なんか気になるんだよなあ…）

料理が運ばれてくる間、隣で蘭と小五郎が観光してきた場所について話しているのも耳に入らず、コナンはずっと考え込んでいた。

あの桂木、と言うサングラスの男がどうも気になるのだ。

勿論、これといっておかしな行動をしているわけでもなかったのだが、どうも気になって仕方ないのだった。

「…コナン君、コナン君？」

隣に座っている蘭が心配そうに話しかけてくる。

「な…、なに、蘭ねーちゃん？」

「どうしたのコナン君、朝からずーっと考え込んで…。そんなに佐渡ヶ島の観光楽しくなかった？」

「そ、そんな事ないよ。凄く楽しかったよ」

「そう、それならいいんだけど…」

*

そして翌朝の事だった。

新潟市内のビジネスホテル。ホテルの中で朝食を済ませ、出発しようとして3人が荷物をまとめている時だった。

「…それでは次のニュースです。昨夜、新潟市内のマンションで男性の遺体が発見され、警察では殺人事件と見て捜査を始めました」
部屋の中のテレビがニュースを伝えていた。

「ふーん…」

小五郎がいう。

「…この男性は市内に住む村田勝彦さん、36歳で村田さんは何者かによつて首を絞められた跡があり、警察では村田さんが何者かによつて殺害されたと見ています」

「…全く、どこでもこんな事件つてあるんだな」

そういうと小五郎はテレビのスイッチを切るのを合図にしたかのように三人はフロントへチェックアウトに向かった。

「…チェックアウトお願いします」

そして小五郎がキーをフロントに返したときだった。

「…失礼ですが」

それまでフロントのテーブルに座っていた恰幅のいい男と瘦身の男の二人組が小五郎に近づき、恰幅のいい男が話しかけてきた。

「…なんででしょうか？」

小五郎が聞く。

「…やっぱり。探偵の毛利小五郎さんですよね」

痩身の男が言う。

「…私の事をご存知なんですか？」

「失礼致しました。我々は新潟警察署の者で平野と申します。こちらには山本刑事」

そういうと平野と名乗った恰幅のいい刑事は警察手帳を見せた。

「…それで私に何の用でしょうか？」

「ええ。ちよつと毛利さんにお話が聞きたくて、先ほど新潟市に来たんですよ」

「お話？」

「はい。なんでしたら、その喫茶店で」

そして小五郎たち三人はホテルの近くにある喫茶店へと向かった。

(後編に続く)

(後編)

二人の刑事たちに連れられ、小五郎たちはホテルの近くの喫茶店に入った。

「…それで、私に話と云うのは？」

小五郎が言うと平野刑事が、

「実は今朝、新潟市内のマンションで男性の遺体が発見されたのですが…」

「ああ、そのニュースなら今朝、ホテルのTVで見ましたよ」

「それでしたら話は早いですね。実はですね、先ほどから重要参考人の男を警察に呼んで、事情を聞いているんですが、その男がアリバイを主張してまして…」

「アリバイを、ですか？」

「ええ。何でもその男が『有名な探偵の毛利小五郎が自分のアリバイの証人になってくれるはずだから話を聞いてみる』と主張しましたねえ。あちこちのホテルに問い合わせたら、先ほどのビジネスホテルと同じ名前の人物が宿泊している事がわかりまして」

「…それで、あのホテルに？」

「そういうことになりますね。それで毛利さんにこれから署のほうでお話を伺おうかと思いましたが」

「…しかしねえ。昨日我々は佐渡ヶ島の観光に行ってたんですよ」

「ええ、存じ上げております。その件もありまして、佐渡のほうにも応援を頼んで、刑事が一人、今こちらに向かっているんですよ」

「ほほお。…それで、その佐渡から来る刑事と云うのは？」

「今朝の1番のジェットフォイルで来ると言っていましたから、もうそろそろだと思っんですけどねえ…」

そういいながら、平野刑事が腕時計を覗いた時、

「…平野さん、来たようですよ」

山本刑事が言うと、一人の男が喫茶店に入ってきた。

「元気でしたか、平野さん」

その男が小五郎たちが座っているテーブルに近づく。と、

「誰かと思っただら森本さんですか」

平野刑事が言う。

「いえいえ、こちらこそ」

「…お知り合いですか？」

小五郎が聞く。と、

「ええ。結構佐渡で事件が起きたときなどにご一緒するんですよ」

その森本と言う刑事は小五郎のほうを見ると、

「…ああ、やはり探偵の毛利小五郎さんでしたか」

「私の事を知ってるんですか」

「ええ、お話は色々聞いておりますよ。…あ、申し遅れました。

私は佐渡西警察署の森本と申します」

「森本…？ 何処かで聞いたような名前だな…」

そう小五郎が言うと、

「…昨日、毛利さんが乗っておられた観光バスのバスガイド、実は

私の娘なんですよ」

「え？ あのバスガイドがお嬢さんだったんですか？」

「ええ。実は娘が今朝、TVのニュースで事件の事を知ったようで、

署のほうに電話をかけて来ましてねえ。『昨日のバスに探偵の毛利

さんらしい人が乗っていたから話を聞いてみてくれないか』と言っ

てきたんですわ」

「ハハハ…」

それを聞いて、思わずコナンが苦笑した。

「…それじゃ、森本さんも来られた事だし。署の方にいって見ます

か。山本君、頼むよ」

*

新潟警察署。

「…それで、その容疑者とは？」

小五郎が聞くと、

「あの男です」

平野刑事が言う。

「あの男は…」

マジックミラー越しにその男の顔を見たコナンたちは驚いてしまった。

そう、その男こそ昨日コナンたちと一緒に佐渡ヶ島を観光していた桂木と名乗る男だったのだ。

「彼は桂木文彦と言いまして、被害者とは面識があったようですね」

捜査課の応接室。小五郎たちと平野刑事、森本刑事の二人が向かい合って座っている。

「面識があった？」

「ええ。なんでも被害者からはかなりの額の借金があったようで、最近返す、返さないでもめていたようですね」

「確かに動機としては十分ですな。…ところで平野さん」

「なんでしょうか？」

「…その、村田さんの死因、ってなんでしょうか？」

「ああ、そういえばまだ話してませんでしたね。…山本君」

平野刑事は丁度茶を持ってきた山本刑事に捜査結果を話すように促した。

「…ええっと、確かですね…」

5人の前に茶を置くと山本刑事が警察手帳を広げる。

「…村田さんの死因は警部圧迫による窒息死のようですね。首になにやらひも状のようなものが巻きついていたあとが残ってました」

「発見者は？」

「隣に住んでいた住人ですね。昨夜遅くに外出先から帰ってきたら被害者の部屋のドアが半開きになっているのを発見して様子がおかしいと思って中を見てみたら、部屋の真ん中で被害者が死んでいた、と言ったことです」

「…となると、誰か出入りがあったのかな？」

「だと思っんですがねえ」

「…死亡推定時刻は？」

「昨日の12時から1時ごろの間ですね。目撃者も探したんですが、さつきも言ったとおり、隣の住人は朝から出かけていたそうだし、休日でも人通りも少なかった事もあってこれといった有力な証言もなかったんですよ」

「ふーん。…ところで、その桂木と言う男が重要参考人になったというのは？」

「先ほども言ったように被害者と桂木の間には借金がありましたし、被害者の爪の間からなにやら皮膚のようなものが見つかったんですよ」

「皮膚？」

「ええ。おそらく激しく被害者も抵抗して、犯人の身体を引っかいたものだと想像できるんですが…。そして桂木の手からもなにやら引っかき傷のようなものがあつたんですよ。DNA鑑定の方は今やっている途中なんです…」

「…それではヤツが犯人のようなものではないですか。どうしてアリバイを主張しているんですか？」

「それでちよつと毛利さんにお話が聞きたくて」

「私に、ですか？」

すると今度は森本刑事が、

「娘から話を聞いたんですけど、昨日毛利さんと一緒にあの桂木と言う男も一緒にバスで観光に参加していたそうですね」

「…ええ、ええ、確かに。あの桂木、って男は私も何度か見かけましたからね」

「…何かおかしな行動とかは見られませんでしたか？」

「いえ、特には…」

「そうですか」

「そうですか、って…」

「いや、もし桂木が犯人だとしたら、どうやって被害者を殺害したのでしょうか？」

「どうやって、って…？」

「被害者は新潟市で発見されたんでしょう？　そしてその死亡推定時刻と思われる頃にその容疑者は佐渡ヶ島で我々と一緒に観光をしていた…。一瞬にして佐渡ヶ島から新潟に移動して犯行を行うなんていくらなんでも不可能でしょうが？」

「…確かにそうですが…」

「だとしたら容疑者は何らかの形で佐渡ヶ島から新潟に移動した、と考えるのが普通ではないですか？」

「…確かにそうなんですが、佐渡から新潟まではジェットフォイルでも1時間あまり、カーフェリーだと2時間半もかかるんですよ。そのときだった。何かを思い出したように蘭が、

「…そういえばバスの中で聞いたけど、佐渡から新潟まで飛行機が飛んでましたよね？」

「無理ですな」

森本刑事が一言でその言葉を否定した。

「無理、ってどういうことですか？」

「確かに佐渡から新潟までは1日4便が飛んでますし、飛行機なら25分で新潟まで行けます。しかし、丁度被害者の死亡推定時刻には新潟からも佐渡からも飛行機は飛んでいないし、先ほど佐渡から情報があつて、桂木らしき男が乗っていた、と言う証言はなかったそうですよ。それに飛行機で往復するだけで50分かかりますよ。佐渡にいた容疑者が新潟に渡って犯行を行い、また佐渡に戻ってくるまでどう少なく見積もっても1時間半から2時間はかかるはずですよ。娘から聞いた話だと、あのツアーでそんなに見学時間を取っている場所はないそうですな」

確かにそうである。あのツアーで一番長く休憩を取っていたのは昼食をとっていた1時間くらいである。あとは20～30分程度で見学を終え、次の場所に向かっていたはずである。

「それに、あの旅行ではバスが出発するたびにバスガイドさんが人数を確認していたはずだよ」

コナンが言うと森本刑事が、

「…確かにそうですね。娘から聞いた話ですけど、島内の観光に出発する際にはまずあらかじめ名簿に書かれた乗客が乗っているかどうか点呼を取るそうだし、行く先々でも全員が揃って初めて出発するそうですからな」

コナンたちは昨日のバスの中で森本刑事の娘と言うバスガイドが点呼をとっていたのを思い出した。

「…となると、途中で抜け出して新潟に向かって犯行を行なう、って事はあの人にはどうしても無理、と言うことよね」

「…それじゃ、逆に被害者が佐渡で殺された、と言うのは？」

「勿論我々もそれを考えましたよ。毛利さんもご存知でしょう？ ジェットfoilに乗る際には乗船名簿代わりにカードに氏名を書きますけど、調べてみたら被害者が乗っていた形跡がなかったんですよ」

確かに昨日小五郎たちも佐渡へ向かう時と、新潟に戻る時にカードに氏名を書いて改札の時に係員に渡したのを思い出した。

「…となると、あの男は犯人じゃない、と言うことになるんだろうか…？」

そのときだった。携帯電話の着メロがあたりになった。

「…あ、失礼」

そう言うと森本刑事は携帯電話を取り出した。

「…森本だが…うん、うん……わかった。そっちはそっちで捜査を続けてくれ。私もこっちがひと段落付いたらそっちへ戻る」

そう言うと森本刑事は携帯電話を切る。

「…どうかしましたか？」

平野刑事が聞く。

「…いや、今、佐渡のほうから連絡がありましたね。今回の事件と関係があるかどうかかわからないのですが、佐渡市の運送会社に勤め

ている男が一人行方がわからなくなっているらしいんですよ」

「行方がわからない？」

「ええ。昨日会社に出勤する、といって家を出たきり戻ってこないらしいんですよ。それで家族が搜索願を出したそうなんですがね」

「会社には出勤してたんですか？」

「いえ、会社の方には急用が出来た、といって昨日は休んでいるという話でしたよ」

「…なんですか？」

「署の方には捜査を続ける、と言ったんですけどね」

(…待てよ…)

そのとき、コナンの脳裏にはある考えが頭に浮かんだ。

(…もし、そうだとしたら…)

そしてコナンの頭の中であるひとつの解答が思い浮かんだ。

(…そうか、だとしたら納得が行くな)

そしてコナンは時計型麻醉銃を小五郎に向けて。

「…来た！」

「…どうしたんですか、毛利さん？」

平野刑事が小五郎に聞く。

「…もしかして…」

蘭が呟く。

「…ようやくわかりましたよ、この事件の謎が」

物陰に隠れていたコナンが蝶ネクタイ型変声機で喋る。

「本当ですか？」

「ええ。私の考えによればやっぱり犯人は桂木ですよ」

「本当ですか？」

「ええ。私もどうしても桂木が佐渡ヶ島から新潟に移動する方法がわからなかったんですが、結局はそれが盲点になっていたんです。ある一言が私に重大なヒントを与えてくれたんですよ」

「重大なヒント？」

「ええ。森本刑事は先ほど『佐渡氏の運送会社の社員の一人の行方がわからなくなっている』と言いましたよね？」

「ええ、それがどうかしましたか？」

「よく考えてみればなあんだ、と思うトリックですよ。桂木が新潟まで移動して犯罪を行なった、と考えるからわからなくなるんですよ。やっぱり死体に来てもらったんですよ」

「死体に来てもらう？ …… どういうことですか、毛利さん」

平野刑事が聞く。

「桂木と被害者の村田さんの間には金銭の貸し借りを廻ってトラブルがあつた。それが今回の動機でしょう。そして桂木は前もって犯行当日に佐渡ヶ島に来るように村田さんに言つてあつた。犯行当日、桂木は現場で落ち合つて村田さんを殺害する。丁度村田さんが死んだと思われる12時半から1時半頃は我々の観光もちょうど昼食の時間だつたから時間は十分にあるはずですよ。そしてあらかじめ待機させてあつた協力者 おそらくそれが行方不明になっている運送会社の社員でしょう に運ばせ新潟に戻つた…。佐渡から新潟まではカーフェリーも通つてますから死体を乗せて新潟に戻る事は十分に可能ですよ。桂木か絞殺、と言う手段を取つたのも返り血を浴びたり、現場に血が落ちたりするのを防ぐ為でしょう。そして死体を新潟に戻した桂木は何食わぬ顔で我々と一緒に観光を続け、死体のほうは協力者に新潟のマンションまで運ばせて、遺体発見現場であるマンションに残しておく…。合鍵はおそらく死体が持つていた合鍵を使つたんでしょう。普通外出する時は鍵をかけてからですよ。からね。そしてこれはたまたまだつたかもしませんが、当日は休日だつたこともあつて、マンションの隣の住人が朝から出かけていたから死体を運ぶところも見られていなかったのが幸運だつたでしょうな。もし隣の住人が見ていたとしても、その運送会社の人物が協力者だとしたら、怪しまれる心配はないはずですよ」

「…じゃあ、ジェットfoilの乗船名簿に名前がない、と言うの

は？」

「それはおそらく偽名を使って乗り込んだんでしょ。いくらジェットfoilにこれから乗ると言っても、その乗客の身分照会をいちいちはしませんでしよう？」

「え、ええ。まあ」

「ですから仮に村田さんが偽名を使ってジェットfoilに乗ったとしても、怪しまれる可能性はないでしょう。もしかしたら変装をして乗り込んだ可能性もある。その辺を知らべて見れば何かわかるかもしれない」

「…わかりました。山本君、早速新潟港の方に捜査に言ってくれ」

「わかりました」

「じゃあ、私の佐渡の方に連絡してみます」

そういって森本刑事も部屋を出て行った。

その後事件は急展開を迎えた。

山本刑事が新潟港でなにやら帽子を深めにかぶりサングラスをかけた男がジェットfoilに乗船した、という証言が取れ、一方の森本刑事の方もその行方不明になった運総会社の男の写真を両津港周辺で見せて回ったところ、よく似た男がカーフェリーに乗船した、という証言が取れた、という情報が佐渡西警察署の方から来た、と言う。

そして翌日、行方不明になっていた佐渡市の運送会社の社員が石川県内に潜伏していたところを発見された。

桂木はアリバイを主張し続けていたが、その社員が証言した事により、桂木もついに犯行を自供せざるを得なかった。

*

そして数日後、毛利探偵事務所の上にある小五郎たちが住んでいる家の夕食時。

小五郎が猪口に入った酒を飲み干す。

「かつ、美味え。こんな美味しい酒飲んだのは久しぶりだぜ」
小五郎は物凄く上機嫌だった。

見るとテーブルの上には小五郎が佐渡で買うのを断念したはずの「四合しか入っていないなくて5000円の日本酒」が置いてあった。
実は今日、探偵事務所在宅配便が届いたので中を見てみると、佐渡西警察署の森本刑事から「あくまでも個人なものです」との前置きがあつたが事件を解決してくれたお礼に、という事でわざわざこの酒を贈ってきてくれたのだった。
思いがけず目当ての酒を手に入れることができた小五郎は大喜びで、こうして飲んでいる、と言うわけである。

「…ねえねえ、蘭ねーちゃん」

コナンが話しかける。

「何、コナン君？」

「全くおじさんも現金だよ」

「本当よね。佐渡で『あんな高い酒買えるか！』なんて言ってたのにね」

「きつと貰ったお酒だからだよ」

「でもよかつたんじゃない。これでお父さんも佐渡へ行った甲斐があつた、というものよ」

「？　なんか言つたか？」

「ん？　なんでもない」

「そうか」

そういうと小五郎はその酒に蓋をすると戸棚にしまい込み、冷蔵庫からビールを取り出した。

「あら？　お父さんもう飲まないの？」

「あつたりめえだ。あんな高い酒、一気になんか飲めるか！　これから暫く、少しずつ飲んでいくんだよ！」

(…ハハハ、おっちゃんらしいや)

佐渡 新潟瞬間移動の壁～ CONAN IN SADO ISLAND～

（おわり）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2156b/>

佐渡 新潟瞬間移動の壁～ CONAN IN SADO ISLAND～

2008年8月13日20時52分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。